

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

中級日本語文法シラバス再考のための文型使用実態調査（２）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-11 キーワード (Ja): 中級日本語, 日本語教育文法, 中級日本語シラバス, JFスタンダード, Can-do キーワード (En): 作成者: 高屋敷, 真人 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000347

中級日本語文法シラバス再考のための文型使用実態調査（２）

高屋敷 真人

要旨

関西外国語大学留学生別科の中級日本語コース（Japanese 5 と Japanese 6）では、交換留学生を対象に、コースで学んだ文法項目を実際の日常生活でどの程度使用したかについて実態調査を行っている。本稿は、2024 年秋学期に実施された文型使用実態調査の方法や調査結果について報告するものである。この調査の目的は、学習者が実際のコミュニケーション場面でレベルにあった文型や表現を使用できているのかどうかを再考すること、そして、従来の日本語学的観点から作成された中級日本語シラバスの問題点を具体的なデータに基づいた日本語教育文法的立場から見直し検討することである。

【キーワード】 中級日本語、日本語教育文法、中級日本語シラバス、JF スタンダード、Can-do

1. はじめに：理論と背景

1.1 関西外国語大学留学生別科日本語中級コース概要と使用教材

本調査は、科学研究費助成金事業、2024 年度基盤研究 C（課題番号：24K04173）に採択された「日本語中級者用モジュール型教材作成に向けたニーズ調査と基盤研究」の一環として行われているものである。この調査の対象は関西外国語大学留学生別科の中級日本語コース、Japanese 5（中級前期）及び Japanese 6（中級後期）、（以下、JPN5、JPN6）の 2 コースを履修している交換留学生である。前回の調査は、JPN5 の交換留学生を対象に行われ、拙論「中級日本語文法シラバス再考のための文型使用実態調査」（高屋敷 2023）にその結果をまとめ報告した。今回の報告は、前回の JPN5 レベルに引き続き、JPN6 を履修した学生を対象に行われた調査の結果をまとめたものである。本調査の基盤となる理論と背景については、拙論「中

級日本語文法シラバス再考のための文型使用実態調査」(高屋敷 2023) で詳しく述べているので、本稿では概要のみに留める。

本学留学生別科の日本語コースは、春学期と秋学期の 2 学期制で開講され、日本語コースは、1 学期 15 週間、一コマ 90 分の授業を週 3 回行っており、総授業時間は 4050 分 (67.5 時間) である。中級日本語コース (JPN5 及び JPN6) と上級日本語コース (JPN7 及び JPN8) では、2023 年度にシラバスの改訂を行い、国際交流基金 (JF) が 2010 年に策定した JF 日本語教育スタンダード (以下、JFS) と日本語能力試験 (以下、JLPT) を参考に統一したシラバスを作成し、2023 年度の秋学期から使用を始めている。JPN6 のメイン教材は、モジュール型教材の体裁で筆者 (高屋敷) が各ユニットを執筆し、各ユニットをパッケージとして配布する方式での教科書として使用している。

2023 年度の統一シラバスの策定では、各コースで文法項目のレベルの見直しが行われ、文法項目選択の目安として、中級レベルでは JLPT のレベルを下記のように制定した。

JPN5 : N3 で取り扱われる文型 (文法項目)

JPN6 : N2/N3 で取り扱われる文型 (文法項目)

JPN6 の文法項目については、JLPT の N2 と N3 で取り扱われている文法項目を JFS の熟達度 B1 レベルの能力記述文 (Can-do) と照らし合わせ、留学生の日常生活の日本語接触場面で役立つものであるかどうかを検討し選定した。国際交流基金は「ヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages」(以下、CEFR) を基に JFS の熟達度レベルを設定している。B1 レベルは「自立した言語使用者」を目指すもので、CEFR で示されている B1 レベルの全体的な尺度は下記の通りである。(国際交流基金 2017)

- 仕事、学校、娯楽で普段出合うような身近な話題について標準的な話し方であれば主要点を理解できる。
- その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。

- 身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。

JPN6 の教材作成過程では、この熟達度の内容記述に合わせて、留学生のニーズに対応し得るモジュール型教材（要望対応型教材）の作成を行った。現在主流であるコミュニケーション・アプローチや Can-do シラバスに基づく言語教育においては、学習内容、教室活動を教室外の言語活動に近づけようとする努力が教材開発に求められている。そのような教材作成を遂行するためには、「モジュール型教材」が有用である。モジュール型教材とは「教科書のように特定の順序に沿って一つ一つの課を学習するタイプの教材とは違い、学習者が既に学習し終わっている項目から一定程度独立して使えるように作成した教材」（岡崎・岡崎 1990）である。

2023 年度の新しいモジュール型教材の開発時も、前述したように JFS と JLPT の N2 及び N3 レベルを基軸として作成を行った。今回の教材開発では、この JF Can-do での具体的な能力記述文を参照し、JFS の「JF スタンドアードの木」で示されているコミュニケーション言語能力、すなわち、言語構造的な能力、社会言語能力、語用能力の三つの能力を育成するため、彼らが日常生活で本当に必要としているコミュニケーションの受容／産出場面からシラバスをデザインし、彼らの興味・関心、ニーズに対応し得る教材の作成を目指した。また、学習の評価でも学習者が獲得した言語知識を用い、実際にどのくらい日本語を使用できたかどうかに関心を当てる。具体的には、各ユニットの話題についてパワーポイントや動画を用いた発表を行い、コミュニケーション言語活動（受容、産出、やりとり）が実践できるように配慮した。（国際交流基金 2017）

1.2 先行研究：現行の文法シラバスの問題点

昨今、日本語文法シラバスを再考するために、具体的データに基づいた複数の異なるアプローチを用い、初中級の文法シラバスを再考して行こうという試みが報告されている（庵・山内 2015）。また、既存の文法シラバスが初級では「シンタクスに関わる狭義の文法」、中上級では「複合辞を中心とする機能語の学習」に偏っているのではないかという指摘もある（小林 2009）。このような現行の日本語文法シラバスに関する状況に対して、「学習者の多様化に対応する文法」を再考する必要性があること、そして、日本語学に依拠して選定された日本語文法からの脱却を図

り「日本語学習者が日本語でコミュニケーションする時に必要な文法」へと転換していくべきではないかという提唱もされている（野田 2005）。本調査では、上述の先行研究で指摘されている学術的問いを鑑み、国内で学ぶ中級日本語学習者の学習動機や興味・関心は何であるのか、日常生活で日本人とどのような接触を図るのか、実際のコミュニケーション場面で真に必要とする中級文型は何であるのかを明らかにし、先行研究で指摘されている現行の中級文法シラバスの偏りについての具体的なデータを提示していきたいと考えている。

2. JPN6 における各ユニットのディスカッション・トピックと文法項目の選定

JPN6 は、1 学期に 7 ユニットの学び、4 コマ（1 コマ 90 分）の授業で 1 ユニットが終えられるようにデザインされている。学習者は各ユニットのディスカッション・トピックについてクラス内でパワーポイントを使用した発表を行うことを最終目的としている。そのために、包括的な Can-do として「ユニットのトピックに関する発表用の資料を探す」「資料をパワーポイントにまとめる」「クラスでのディスカッション用に質問を考える」「クラスディスカッションの司会を行う」などの Can-do を設定した。各ユニットは、それぞれ 1 コマ目と 2 コマ目のクラスでは、ディスカッション・トピックの導入とユニットにおける Can-do の説明を行い、各ユニットで学ぶ文型（6～7 文型）を用いたトピックに関する「やりとり」、小さいスキットでのコミュニケーション運用能力を養う練習を行っている。3 コマ目には、単語リスト（50～55 の新出単語）の単語を覚えたかどうかの単語クイズ、新出単語を使用してトピックに関する文や質問に答える、意見を産出するなど、様々なコミュニケーション言語活動の練習を行っている。4 コマ目では、ユニットの本文会話をうい、受容（聞き取り）、産出（話すこと全般）、やりとり（意見交換）などのコミュニケーションのための言語活動を総合的に行っている。

このように一つのユニットを終え、トピック（本文内容）について、最終的にディスカッションが行えるようになるという Can-do のために、新出文型と語彙を用いた言語活動を考えて教材を作成した。以下は JF Can-do で付与されている 15 のトピックである。（国際交流基金 2017）

「自分と家族」「住まいと住環境」「自由時間と娯楽」「生活と人生」「仕事と職業」

「旅行と交通」「健康」「買い物」「食生活」「自然と環境」「人との関係」
「学校と教育」「言語と文化」「社会」「科学技術」

各ユニットのトピックの選定については、これら 15 のトピックを参照し、中級レベル (B1 レベル) で扱う自分の日常生活の身近な話題から段階的により個人的、社会的な話題への移行を念頭に置き、さらに岡崎ほか (2003) が提唱している学習者の自立を促すカリキュラム・デザインに則り、留学生の個々のニーズや個性を自発的に引き出せるようなカリキュラムをデザインすることを心掛けた。(岡崎ほか 2003) 各ユニットのトピックは下記の通りである。

Unit1 SNS と私たちの生活

Unit2 交通機関のマナー

Unit3 ジェンダーギャップ指数と私の国

Unit4 和食と世界の食べ物

Unit5 関西は好きですか？

Unit6 迷信を信じますか？

各ユニットにおける学習内容 (語彙や文法項目) を決める際には、まず、JF の「みんなの Can-do サイト」を参照し、ユニットのディスカッションのトピックに見合う B1 レベルの Can-do を抽出した。それを基に複数の談話モデル (本文) を考え、学習者が自ら意見交換をしたり提案を述べたりするために談話を組み立てることを Can-do として設定した。次に中級 (B1) レベルを想定した談話を組み立てるために必要な新出単語、表現、文型などの言語項目を考えた。

具体的にユニット 1 の「SNS と私たちの生活」を例に挙げて説明すると、まず JF の「みんなの Can-do サイト」で、B1 レベルを選び、第一トピックの「自由時間と娯楽」と「生活と人生」を選択し、更に「受容」「産出」「やりとり」のカテゴリーの「話しことば」全てにチェックを入れ、Can-do を探す作業を行った。次に候補の Can-do を参考にして、JPN6 Unit 1 「SNS と私たちの生活」のための「My Can-do」を作成した。(国際交流基金 2018)

作成例は、「自分の国で使用されている SNS / ソーシャルメディアについて説明

できる」「よく使うアプリや便利なアプリについて日本人の友人に勧めることができる」「アプリの登録、設定などを日本語で説明できる」「自国と日本のインターネット・スラング、emoji/kaomoji の違いを理解し説明することができる」「LINE スタンプとテキストメッセージで使われる emoticons を比較し、その違いを理解し、説明することができる」「ソーシャルメディアの問題点（既読無視、LINE 疲れ、ネット中毒、睡眠障害など）を調べ、問題について自分の意見が言える」などである。次に、そのために必要な語彙や文法項目をリストにし、本文や談話練習を作成しユニット・パケットにまとめて配布を行った。実際の談話例は、「ソーシャルメディアと言えば、まきちゃんはどんなアプリを使ってるの?」「新しいアプリの設定なら、私が説明した通りに、登録してみてよ。」「SNS に夢中になりすぎると、ゲーム中毒や睡眠障害になりかねないよ。」などである。（文中の下線は選定した文法項目の例）

3. 文法項目の使用実態調査

3.1 調査方法と調査結果

2024 年秋学期の最後に、質問紙を用い複数回答問題を作成し、JPN6 の 2 コースの履修学生にアンケート調査を行った。回答は複数回答可である。履修学生 22 名中、回答のあった留学生 12 名の内訳は、下記の通りである。

2024 年度秋学期

性別： 男子学生 3 名 女子学生 8 名、どちらでもない 1 名

国籍： アメリカ 4 名、アイルランド、イギリス、イスラエル、イタリア、
スペイン、スロバキア、パラグアイ、メキシコ、各 1 名

今回の調査では、まず、「パケットの文型と語彙は日常生活で役に立ったか」という設問に回答してもらい、更に、「JPN6 で取り上げて欲しいトピックは何か」について回答を得た。JPN6 で学ぶ 36 の文法項目の調査結果は、使用度の比率が高い順に、下記のように表 1 にまとめた。

表 1: 2024 年秋学期「今学期の文法項目：日常生活で使用したか？／役に立ったか？」

文型	全然	普通	頻繁に	使用度
from the point of view of~ Noun (usually someone) にとって、～。 e.g. この指輪は、 <u>私にとって</u> 、大切な物です。	0	0	12	100.0
without doing~/instead of doing~ ～ずに、～。 e.g. 今日、朝ごはんを食べ <u>ずに</u> 、大学に来ました。	0	1	11	95.8
It seems that; I feel like~ ～ような感じがする／～ような気がする。 e.g. 今日は、何となくいい事が起こる <u>ような気がします</u> 。	0	1	11	95.8
explaining that ~ ～という(～っていう) + NOUN e.g. ジョンがアメリカに帰った <u>っていう話</u> はほんとう？	0	1	11	95.8
In order to do ~ 日本の会社で働く <u>ために</u> 、日本に来ました。 so that ~ 日本の会社で働ける <u>ように</u> 、日本語を練習しています。	0	1	11	95.8
Speaking of ~ ～と言えば、～。 e.g. SNS <u>って言えば</u> 、どんなアプリを使ってるの？	1	0	11	91.7
[So/in short/that is to say/naturally], it means that ~ [つまり／ようするに]～というわけだ。 e.g. A: 明日はテストがあるんだ...。 B: <u>つまり</u> 、一緒に行けない <u>ってわけ</u> だね。	0	3	9	87.5
Depending on whether~ ⇒ Yes-No Question + かどうか によって、～。 According to what/where/who/when/how~ ⇒ Wh-Question + か によって、～。 e.g. 食べ放題がある <u>かどうか</u> によって、店を決める。 <u>だれが行くか</u> によって、その飲み会に出席します。	1	1	10	87.5
(in) the same way as ~ ～通り(に)、～。 e.g. 思っていた <u>通り</u> 、日本の生活は楽しいよ！	0	4	8	83.3
every time; on every occasion ～たびに、～。 e.g. 父は旅行に行く <u>たびに</u> 、お土産を買ってくれる。	0	4	8	83.3
When we compare X to/with Y, (we can see/it is)~. XをY(と／に)比較すると、～。 e.g. 男性給与を <u>女性のと比較すると</u> 、女性の方が低い。	1	2	9	83.3

"It's not absolutely certain that..." A way of speaking to avoid making definitive statements. ～ないことは／も ない。 e.g. 生の魚は食べられない<u>ことはない</u>けど、 あまり好きじゃないよ。	2	5	5	62.5
表やグラフを説明するための表現 急激に／徐々に／順調に 増加／減少して来ている、横ばいの状態が続いている、～に達した／～伸びている／数・量・率・割, etc./ e.g. 1990 年代から日本の子供の数は 徐々に減少して来ている。	3	3	6	62.5
no way to do... V-stem ようがない。 e.g. スマホをなくしちゃったから、 友達に連絡し<u>ようがない</u>よ。	2	4	5	58.3
not just~, not even ~ ～どころか～さえ～ない。 e.g. ジョンは漢字を書く<u>どころか</u> ひらがな<u>さえ読めない</u>よ。	3	4	5	58.3
so long as~; now that <u>V-る／V-た</u> + 以上(は)、～。 e.g. 日本に留学した<u>以上は</u>、 日本語がべらべらになりたいです。	1	8	3	58.3
whether (it's) X or Y X にしろ Y にしろ、～。 e.g. 会社をやめる<u>にしろ</u>会社に残る<u>にしろ</u>、 早く決めたらどう？	2	6	4	58.3
It is not a problem that can be solved by doing ~. ～ばいいというものではない。 e.g. お金を払えば<u>いいというものではない</u>んですよ！	1	8	3	58.3
There is a trend toward ~; to have a tendency to~ N の／V-Plain + 傾向 に・がある。 e.g. 兄は仕事をしすぎる<u>傾向があつて</u>、困っている。	2	6	4	58.3
considering~; despite~ ～わりに(は)、・・・。 e.g. 毎日練習している<u>わりに</u>、英語が上手にならない。	4	3	5	54.2
might be ok for <u>X</u>, but not for <u>Y</u>. <u>X</u> ならともかく、<u>Y</u> e.g. 平日<u>ならともかく</u>、週末は混雑するんじゃない？	3	5	4	54.2

it is precisely because ~ ～からこそ、～。 e.g. コーチは君を心配してる <u>からこそ</u> 、 厳しいことを言ってるんだよ。	1	10	1	50.0
cannot help doing ~ ～ずにはいられない。／～ないではいられない。 e.g. 僕はゲーム中毒で、 毎晩ゲームを <u>せずにはいられない</u> んだ。	1	10	1	50.0
~ could happen [something bad/risky] ～かねない。 e.g. ゲームをやりすぎると、中毒になり <u>かねない</u> よ。	2	9	1	45.8
not necessarily; not always true that ~ ～とは限らない。 e.g. お金がたくさんあっても、 みんな幸せを感じる <u>とは限らない</u> 。	3	7	2	45.8
and as one would expect; so (naturally) ～だけに(なおさら)、～。 e.g. けんはイギリスに留学していた <u>だけに</u> 、 英語がぺらぺらだ。	3	8	1	41.7

3.2 調査結果：「文型と単語は日常生活で役に立ったか？」

今回の調査では、まず、「パケットで扱われた文型と単語は、日常生活で実際に役に立ったと思うか？」という設問への回答を得た。パケットで取り扱った文型に関しては、「大変役に立った」が 10 名（80％）で、「役に立った」が 2 名（20％）であった。前回（2023 年秋学期）の調査（回答者 25 名）では、パケットで取り扱った文型に関しては、「大変役に立った」が 9 名（35％）で、「役に立った」が 14 名（54％）であった。「普通」と回答した学生は 2 名（8％）であったので、2 回の調査を合わせると、37 名中、「大変役に立った」が 19 名（51％）で、「役に立った」が 16 名（43％）、「普通」と回答した学生は 2 名（5％）である。この結果、94％の学生がパケットで扱われた文型は実際に日常生活で役立ったという回答を得ることができた。

パケットで取り扱った新出単語に関しては、「非常に役に立った」が 7 名（60％）で、「役に立った」が 4 名（30％）、普通が 1 名（10％）であった。これに前回（2023 年秋学期）の調査結果、「非常に役に立った」が 16 名（61％）で、「役に立った」の 9 名（35％）を合わせると、37 名中、「非常に役に立った」が 23 名（62％）で、

「役に立った」が 13 名 (35%)、「普通」が 1 名 (3%) という結果になった。語彙に関しては、97%の学生が有用だったという回答が得られた。今のところ、回答数は前回の調査と合わせて 37 名であるので、信頼性の高いサンプル数 (約 400 人) には達していないが、作成したモジュール型教材のパケットで扱われている文型に関しては 94%、語彙に関しては 97%が実際の日常生活で有用であったという結果を得ることができた。今後、更に、JF Can-do の能力記述文との照らし合わせを行い、留学生の実情に合致する「My Can-do」にすべく改訂を続けて行きたい。

3.3 調査結果の分析

文法項目の実態調査の結果、調査した 36 文型のうち、留学生の日常生活で、全く使用されなかったものはなかった。一番使用率が低かった「～だけに (なおさら)、～」でも、41.7%の使用率で、4 割強の留学生が日常生活で使用したことがわかった。36 文型のうち、33 文型が 50%以上の使用率で、JPN6 で学期中に学んだ中級文型は、留学生の日常生活で一定程度使用され、ある程度有用であったと言えるだろう。

筆者は中級レベルの交換留学生を対象に 2017 年秋学期から 2019 年秋学期の 4 学期間、「どのような場面で日本語を使用したいか」という設問でアンケート調査を行った。4 学期の留学生 120 名の回答では、「駅員に券売機の使い方を教えてもらう」、「レストランでメニューについて質問する」などの特定場面ではなく、日常生活時のいわゆる「話すこと全般」「口頭でのやりとり全般」、すなわち「雑談」のために日本語を使用したいと考えていることが明らかになった。この調査では、留学生は、学期中、寮内外での日本人学生の友人とのおしゃべりでの日本語使用に終始していることが明らかになった。(高屋敷 2020) この調査結果から表 1 の文法項目の実態調査の上位 5 文型について考察してみると、「私にとって、車内での飲食が不快に感じる。」(100%)、「絵文字を使わずに、日本人の友達とメッセージのやりとりをしますか。」(95.8%)、「何だか誰かに見られているような気がする。」(95.8%)、「木を叩くと、悪い事が起こらないという迷信を信じる？」(95.8%)、「日本で働くために／日本で働けるように、JLPT の N1 テストに合格したい。」(95.8%) の上位 5 文型は、談話で使用されやすく、日本人の友人との雑談などで多く使用されるのではないかと推察される。

下位の3文型は、40%台で、下位から「ジョンはいつも日本人の友達と出かけているだけに、日本語会話が上手だね。」(41.7%)、「日本人がみんな神道の信者であるとは限らない。」(45.8%)、「ネットゲームをやりすぎると、ゲーム中毒になりかねないよ。」(45.8%)であった。この比率を低いと断定することはまだ出来ないの
で今後もデータを蓄積していきたい。「～とは限らない」は、JPN5で、より口語的な表現「～わけじゃない」が選定されており、この文型は前回のJPN5の文型使用実態調査でも39.3%の使用率が下位から2番目であった。教師側の視点で考えると、一般的に導き出せる結論を否定する時に便利な表現であると思うのであるが、なぜこの2文型の使用率が低いのか今後の課題として注視していきたい。

次に注目したいのは、「～かねない」で、悪い事が起きる可能性がある「～恐れがある」と同義であるが、やはりこれらの表現は書きことば的で硬い言い方であるので、大学生の友人同士の会話としては敬遠されたのではないかと推察する。また「～てしまうかもしれない」のような口語的な類似表現が使用できることも低使用率の一因であるかもしれない。

「～とは限らない」は、「アメリカ人だからと言って、みんなハンバーガーが好きだとは限らないよ。」「日本人だからって、みんな寿司を食べるとは限らないよ。」などステレオタイプの考え方に対して反論するという場面で、談話を作成する練習を行ったが、中級後期の学習者といえども、産出レベルで、複文の談話を作成するにはもう少し練習を行う必要があることを感じた。類似表現の「～わけではない」は、庵の中上級シラバスのStep 4(中級)で、頻度の高い文法項目として選出されているので、今後も使用率を注視していきたい。

また、前回の調査結果の報告(高屋敷 2023)で、庵(2015)がコーパス調査の結果を分析し提案している、具体的なデータに基づいた使用頻度の高かった新しい文法シラバス: Step 1～Step 2の初級文法シラバス、Step 3～Step 6の中上級文法シラバスについて言及したが、Step 2(初級後半)で選出されている、目的を表す「～ために、～」と結果としての状態を導く「～ように～」、Step 4(中級)の「～ず、～」 「～わけだ」については、2023年度の改訂の際に、新しい文法項目としてモジュール型教材に組み込んだ。上述したように、「～ずに、～」と「～ために／～ように」は95.8%とJPN6でも使用率が高かった。「～わけだ」に関しては、ある事情や状況を前提として、それに対して再確認を行う「(つまり)～というわけだ」の

形を選定したが、こちらも 87.5%と高い使用率を得た。今後も庵の提唱する中上級シラバスの Step 4（中級）の文法項目を参照し、取り入れられる項目について積極的に検討していきたい。

文型使用率の分析結果については、まだ 1 学期間の 12 名のみの結果であるので、今後、信頼に足るサンプル数（約 400 名）に達するまで調査を継続していきたい。アンケート調査の分析に関しては日本語教員の推察の域を出ていないので、次回は留学生の日本語接触場面についてのフォローアップ・インタビューなども行い、実際の日本語接触場面について更に明らかにしていきたい。

4. まとめ

今回の文法項目の使用実態調査の最後の設問は「今学期、この JPN6 のコースで勉強しなかった文型（ぶんけい: sentence structures）がありますか？ Are there any other sentence structures you want to learn this semester?」というコラムを設け、自由記述方式で書いてもらった。11 名の学生から回答があった。

学生 A：「本を読む。ニュースとインターネット。友達と自然に話し合う。」

学生 B：「海外在住の日本人。結（学生寮）の日本人学生と話す。『くだけた会話』は良かった。」

学生 C：「日常生活」

学生 D：「インターネットで美容室を予約する。友達と色々な話題について話す。」

学生 E「歴史や外交。レポート（論文）の書き方。記事。このコースはスピーキングのために良かった。」

学生 F「日常生活について話せて良かった。アカデミックな日本語を使用できるようになりたいので、グラフの説明は良かった。」

学生 G「友人と趣味、生活、旅行など色々なトピックで話す。砕けた会話を習えて良かった。関西弁を学んだので、食堂や店員さんの言っていることが分かって良かった。漢字の読みを覚えたので菜食主義の友人を助けてあげることが出来た。日常生活の様々な場面で応答が出来るようになった。」

学生 H「日本人の友人と色々なトピックについて話した。病院について。」

学生 I「友人と話す。くだけた会話と敬語の切り替えをうまくやりたい。」

学生 J「日常生活で問題なく話せた。教師になりたいから様々な年齢の学生と話

したい。今学期は全部良かった。外国人には少し難しいので、日本のヘルスケアについて学びたい。」

学生 K 「店員と話す時の表現を学びたい。」

などの声があった。「くだけた会話」「関西弁」について好意的な評価を得た一方で、「論文の表現」「アカデミックな日本語」「敬語」を学びたいという意見も散見されるので、今後の Can-do 候補として具体的に組み入れて行きたい。また、先学期は季節性インフルエンザなどに罹患する学生も多かったせいか「病院」「ヘルスケア」というコメントも見られたので、これについても日常生活の Can-do になるかどうか考えて行きたい。

前回の JPN5 を対象として調査報告でも述べたが、野田が編者を務めている『日本語教育のためのコミュニケーション・アプローチ研究』では、日本語の構造や体系を重視する言語学的な研究の論理で決められた教育内容から脱却し、実際に日本語を使用しコミュニケーションを行う学習者の側から教育内容を再考するための様々な提言がなされている（野田 2012）（高屋敷 2023）。これらの提言からは、日本語接触場面の研究においては、非母語話者である学習者はどのようなストラテジーを用いてコミュニケーションを遂行しようとしているのか、どのようなことがコミュニケーションを阻害する要因になるのか等の研究を続ける必要性が見てとれた。今後も、継続的に留学生の接触場면을調査し、留学生が日本語のコミュニケーション活動の場面で必要な Can-do を My Can-do として蓄積し、その都度、JPN6 のモジュール型教材としての改訂を続けて行く予定である。

参考文献

- 庵功雄・山内博之（編）（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 庵功雄（2015）「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵功雄・山内博之（編）（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』凡人社
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉 編著（2003）『日本語教師のための知識本シリーズ③ 人間主義の日本語教育』凡人社
- 国際交流基金（2017）「JF 日本語教育スタンダード（新版）利用者のためのガイド

- ブック」<https://www.jfstandard.jpf.go.jp/top/ja/render.do> (2025 年 1 月 11 日)
- 国際交流基金 (2018) 「みんなの Can-do サイト」
<https://www.jfstandard.jpf.go.jp/cando/top/ja/render.do> (2025 年 1 月 11 日)
- 小林ミナ (2009) 「基本的な文法項目とは何か」 小林ミナ・日比谷潤子 (編) 『日本語教育の過去・現在・未来 第 5 巻 文法』 pp.40-61. 凡人社
- 高屋敷真人 (2020) 「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査 (2)」 『関西外国語大学留学生別科日本語論集』 29 号、pp.31-45.
- 高屋敷真人 (2023) 「中級日本語文法シラバス再考のための文型使用実態調査」 『関西外国語大学留学生別科日本語論集』 32 号、pp.55-68.
- 野田尚史 (編) (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版
- 野田尚史 (編) (2012) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 くろしお出版

(mtakayas@kansaigaidai.ac.jp)